

ある

ドラキュラ伯爵

の

手記より



ヴァンパイアという種族は、つくづく哀しい存在だと感じる。

豊かな草木の茂る広大な平原の地には、かつての王の宮殿を思わせる格式の高い古城があり、そこに住む我輩はドラキュラ伯爵と人々から呼ばれている。

人間達の平均的な寿命と言われているその何倍もの年月を、この城で過ごしてきた。

これまで若い女の血を飲むことで若さを保ってきたが、現代の厳重なセキュリティの前ではそういうわけにもいかず、澁々トマトジュースを飲む毎日が続いている。つらい。

そろそろトマトジュースも限界だ。直近五十年くらいは騙し々々やってこれたが、もう限界だ。

トマトジュースごときでは若さを保てなくなってきた。このままでは人間と同じように老化が進んでしまう。このままではいけない。なんとかしなければ……。

我輩は考えた。そして考えた末に、ある事に気付いたのだ。

なぜ皆は「老い」を忌み嫌うのか。

なぜ若いほうが良いのか。

なぜ若いだけで美しいと言えるのか。

否！

逆に考えるのだ。

老いることが神聖なのだと。

老いこそが人生の極みなのだと。

老いて何が悪い。足腰が弱くなる？顔にシワが増える？誰がそれを「悪い事」だと決めたのだ？間接痛のどこが醜いと言うのだ？

逆に考えるのだ。

シワシワの顔が美しいのだと。

シワシワの首筋や手の甲が「美」なのだと。

そう考えると、「老い」も怖くなくなってくるのではないか。むしろ「老いたい」と思うようになってくるのではないか。

老いこそが「生命の美」なのだ！

そんな思いを馳せながら、今日も我輩は薄暗く寒い城で一人、トマトジュースを啜るのであった。明日は献血に参加してみようと思う。

若い女の血を飲むことを止めトマトジュースに切り替えてから、すっかり老化が進んでいるように感じる。

我輩の古い先はもう短いかもしれない。

八百年もの間、好き放題に生きてきた人生だ。もちろん悔いは無い。だが改めて「古い」を実感すると、恐怖心が込み上げてくるのを感じる。

我輩の肉体が朽ち果ててしまったあと、この広大な敷地に佇む我が城はどうなってしまおうのだろうか。

愚かな人間達に占拠され、やがては競売にかけられ、人手に渡ってしまうのではないのか。

——耐えられない——

死にも勝る屈辱だ。

八百年の間、人間社会を見てきたが、彼らは実に愚かだ。

幾度も争いを繰り返し、血なまぐさい暴力や略奪が途絶えることはない。

そして彼らはとてつもなく残忍だ。魔女狩りと称し、罪も無い何万人もの男女を処刑してきたりもした。

悪魔崇拝を行っている秘密結社なども、教会の敵とみなされ迫害を受けてきた事実がある。だがそれらの秘密結社は単に、自分達の信ずる「神」を崇拝していたにすぎないのかもしれない。

それを教会は「悪魔崇拝」だと声高らかに断言し、行動を起こした。

資源を巡る争いや宗教戦争など、今日でも争いが止むことはない。

その愚かな人間どもの血を啜ったところで、我輩には何の罪悪感も残らなかった。人間が家畜を食するように、我輩もまたそういう感覚でしかなかった。

しかし今ではどうだ。トマトジュースを飲み、献血にまで参加する始末。同胞が知れば、我輩は頭がおかしくなったと思うことだろう。

だがこれで良いのかもしれない。我輩にはもう何も思い残すことはない。

一人の人間の女を愛し、不覚にもその血を啜ったことで失ってしまった愛を、もう取り戻すことはできない。

何かを「失う」のは、この長すぎる人生の中で初めての出来事であった。

これ以上何を欲すれば良いのか。我輩には人間のような「無限の欲望」など備わってはいない。

もともと希望というものを持たない我輩にとって、絶望などが込み上げてくるはずもないのだが、ま

るで血の抜けたようなこの感覚が、「絶望に似た感覚」であるということをなんとなく思わせる。
それとも献血に参加したせいなのだろうか？

そもそも我輩が献血に参加するなど前代未聞だ。

あのナースの驚きようといったら、いま思い出しただけでも、腹の底から笑いが込み上げてくる。彼女の血を啜りたい衝動に駆られたが、なんとか堪えることができた。

城へ戻り、すぐにトマトジュースを飲んだが……。まったく味気のない一日だったと思う。

あとどれだけ我輩がこうしてられるのかは分からないが、なんとかこの城だけは守りたい。我輩のこの「八百年間そのもの」なのだから。

そうはいっても、手段はたったの二つしかないだろう。

若い女の血を啜り生き延びるか。それとも……。

窓の外から、自動車のエンジン音と共にゴムタイヤが砂利を踏みつける音がする。

どうやら訪問者のようだ。続きはまた後日書くことにしよう。

まったく、人間という生き物はどうしてこうも愚かなのだろうか。
先日、城へやってきた<訪問者>について、書かずにはいられない。

品質の高い砂利が敷き詰められた庭に、静かなエンジン音を奏でながら黒のプリウスを乗りつけてきた彼——訪問者は、なんの躊躇も無く、装飾の施された玄関扉を叩いた。

近隣の住人から<ドラキュラ伯爵>と呼ばれている我輩が、この城に住んでいるということを知っていながらだ。

我輩が扉を開けて出迎えると、彼は青い目で微笑みながら軽く挨拶をし、名刺を差し出してきた。
それにはこう印刷されていた。

ロイヤル不動産 代表取締役社長 アレクサンドル・ジェラル

彼がここへ何をしにきたのか、我輩はすぐに悟った。この城を売ってくれと言うのだろう。

八百年ものあいだこの城に住んでいるが、もう何度も、この手の輩が訪ねてきたものだ。正直、うんざりしている。この城は絶対に売らない。なぜ人間ごときに譲らなければならないのだ。

彼らは我輩をみくびっている。人々は我輩をドラキュラ伯爵と呼ぶが、本当に<ヴァンパイア>であるということは誰も知らない。ましてや、その事実を教えたところで、誰一人として信じようともしないだろう。

人間の寿命を超越するほどの長い年月を生きてきたというのに、誰もがそのことには目をそむけ、我輩を異常者扱いしようとする。「頭のおかしい貴族くずれの男が住んでいる」くらいに思っているのだろう。

もちろん我輩も、人々の前では彼らと同じような素振りをするよう努める。見た目も人間に限りなく近い。ヴァンパイアは空想上の生き物である、と信じている彼らが我輩の正体を見抜けるはずもなく、ただの<イカれた紳士>という風に見られている。

「品格のあるお屋敷ですね」 不動産屋の男——アレクサンドル・ジェラル——は、広々としたホールを鑑賞するかのように見渡しながら言った。堅牢な石造りの壁に彼の声が冷たく反響する。

とってつけたような言い回しがどうも気に入らない。さっさと本題に入ってもらいたいものだ。
聞くまでもないがね。

我輩の返答はすでに決まっている。答えは「ノー」だ。城は譲らない。
だが彼が言い放った言葉は、我輩の想像とはかけ離れていた。

「突然お訪ねしてすみません、ムシュー・ドラキュロス」 少しくせのあるフランス語で彼は言った。
「実はおりいってご相談がありまして——」

ドラキュロス、とは我輩が仮の人間として名乗っている名だ。<アーサー・ドラキュロス>として、

フランス共和国の戸籍に登録されている。

街から離れた平原の広大な敷地と、周囲を見張っているかのように建つ古城を所有する我輩が、ドラキュラ伯爵と呼ばれている所以だ。

彼は訓練された軍人よろしく両腕を後ろに組み、青い眼差しをこちらへ向けながら我輩に訴えかけてきた。

まったく、図々しいにもほどがある。どうしたら初対面の相手にこんな提案が出来るのだろう、とつくづく思う。

彼はこう言ったのだ。

「かつての王国の要塞を無数に建造できそうなほどの、この広大な敷地のほんの一角でかまいません。間借りをさせていただけないでしょうか。ビジネスのお話ではありません。個人的なお願いなのです」

無神経にも、我が城の周りにある使っていない土地の一角を貸してほしいと申し出てきたのだ。

個人的な要望だと？ 不動産屋の男がビジネス抜きで、賃貸の話を持ち出したのだ。何か深い理由があるに違いない、とそのとき思った。

ふん。まさに、そのとおりだったよ。

彼には<クロエ>という名の、二十歳になる娘がおり、郊外にある大学へ通っている。

そのクロエが、彼女と同じキャンパスに通う青年に、毎日のようにつけ狙われて——ストーキングされていると言うのだ。

訴訟問題に発展し、裁判でそのストーカー男はクロエに近づいてはならないと命令が下された。だが男は警察の目を盗み、執拗に追い回してくるらしい。

彼女の住居へ忍び込んで不気味なラブレターを残したり、不意に近づいて体を触ろうとしてきたり、時には悪質な嫌がらせまでしてくるという。

クロエは市街地に住んでいたが、どうにもストーカー男がしつこいので、郊外にある我が敷地を間借りして小さな家を建て、学業が修了するまでのあいだ、そこに娘を住まわせてやりたいという要望だった。

人間の女が、我が敷地内に住むだと？ 同情はするが、そんなもの我輩には耐えられない。

五十年前、愛する人間の女を失ってしまったとき、我輩がどれだけ苦しんだと思うのだ。激しい炎に心を焼き裂かれるような、地獄の苦しみを味わった。

無知というのは愚かしいものだ。

アレクサンドルは我輩が何者なのかも知らずに、愛娘を危険にさらそうというのだ。

我輩が理性を失い<生き血>を欲した時、クロエはこの世を去ることになる。そうなることが分かっていたながら、「わかりました」と安易に承諾できるはずもなく、彼の要望は丁重にお断りした。

青い目を曇らせ、肩を落としてプリウスへ乗り込む彼を見送りながら、我輩は重い扉を閉めた。

二階の自室へ戻り、紙パックの容器に入ったトマトジュースをワイングラスへ注ぎながら、窓の外に目をやった。プリウスが哀しげなエンジン音を奏でながら、遠くへ走って行くのが見えた。

実はこの話にはまだ続きがある。また後日書くことにしよう。